

白居易の「枕」

——生理的感覚に基づく充足感の詠出——

中 木 愛

白居易は、日常の中に掬い取った幸福感を数多く詩に詠み、閑適詩のジャンルを確立した詩人である。睡眠はその閑適世界を形成する重要な要素の一つであり、白居易が睡眠というきわめて生理的な行爲を自己充足として詠じたこと、精神的な充足に加えて肉體的な充足をも詠い上げたことは、従来より指摘されるとおりである。また、睡眠描写に用いられる表現は豊富であり、その背後には、充足している體の様子を鮮明に映し出そうとする意識が認められる。

しかしいま、これらの表現について「詩語」としての側面を見つめ直し、従來の詩語の系譜に照らし合わせてみると、白居易が独自の表現を用いて、独自の幸福の世界を鮮やかに詠出しようとした創作意識に觸れることができる。例えば、睡眠描写に多く用いられる「頭を搔く(搔首)」「伸びをする(欠伸)」の表現は、もともと憂いや疲労感を表すものとして經書に典故を持つ語であった。白居易は、これらの語が従來喚起し續けてきたイメージを、睡眠によって舒びやかになった體のイメージへと轉換し、詩に詠み込んだのである。

「枕」もまた、寝ている人間の姿をストレートに映し出すことのできる語であり、睡眠描写には缺かせない。自己充足として睡眠を詠む

白居易の「枕」の用例にも、當然睡眠の心地よさを詠出しようとする工夫が認められるものと考えられる。筆者は先に、唐詩における「枕」の語について検討したところ、唐代では、従來からの用法を繼承すると同時に、新しい表現が数多く現れること、白居易においては「枕低」「轉枕」「枕臂」「枕書」「枕琴」といった語が特徴的であることが分かった。そこで本稿では、白居易に獨特な「枕」の表現を取り上げ、生理的感覚に基づく充足感の詠出という視點から表現上の獨自性を明らかにしたい。そして、そこに独自の閑適の詩境を創り上げようとする意識がどのように反映されているか考えてみたい。

一、「高枕」「枕低」について

白居易の詩二首に見られる「枕低」の語は、過去に使用例を見出せず、おそらく白居易が獨自に用いた表現ではないかと考えられる。「高枕」であれば、憂いがないさまを言うものとしてあまりに有名な表現であったが、白居易はなぜ、わざわざこれを逆用するような使い方をしたのか、それによって何を表そうとしたのか。

「高枕(枕を高くす)」は、古來より現代に至るまで幅廣く用いられ

てきた語である。早い例では、『楚辭』の宋玉「九辯」に「堯舜皆有
所舉任兮、故高枕而自適。(堯舜皆な舉任する所有り、故に枕を高く
して自適す。)」とあり、後漢の王逸が「安臥垂拱、萬國治也。(安臥
垂拱して、萬國治まるなり。)」と注しており、國が治まって心安らかに
寝るさまを言っていることが分かる。同様の例は、「無楚韓之患、
則大王高枕而臥、國必無憂矣。(楚韓の患ひ無くんば、則ち大王枕を
高くして臥し、國必ず憂ひ無からん。)」(『戰國策』魏策一)、「君常爲
上謀臣。今上欲易太子。君安得高枕而臥乎。(君常に上の謀臣たり。
今上太子を易へんと欲す。君安くんぞ枕を高くして臥すを得んや。)」
(『史記』留侯世家)など枚擧にいとまがなく、多くは國や爲政者に關
して、情勢が安定して憂いのない安らかな心象を表す語として定着し
ている。

これはやがて、より個人的な精神の安定を言う際にも用いられ、隱
居や脫俗をも表すようになる。漢・谷永「與王譚書」(『漢書』谷永傳
引)の「宜深辭職、……闔門高枕、爲知者首。(宜しく深く職を辭し、
……門を闔ちて枕を高くし、知者の首と爲るべし。)」が隱居を表す早
い例だが、この後も「齊桓之興、而少稷高枕於陋巷、魏文之隆、而干
木散髮於西河。(齊桓の興こるも、少稷は枕を陋巷に高くし、魏文の
隆こるも、干木は髮を西河に散ず。)」(『抱朴子』釋滯)といった用例
が見出せる。

唐以前の詩賦では、煬帝「飲馬長城窟行」(隋詩卷三)に「詎敢憚
焦思、高枕於上京(詎ぞ敢へて焦思を憚り、枕を上京に高くせんや)」
が、匈奴の侵入に安心できないさまをいうほか、南平王劉鏞「過歷山
湛長史草堂」(宋詩卷五)の「願逐安期生、於焉愜高枕(願はくは安
期生を逐ひ、焉に於いて愜く枕を高くせん)」は脫俗願望を、謝朓

「落日悵望」(齊詩卷三)の「落日餘清陰、高枕東窓下(落日清陰を
餘し、枕を高くす東窓の下)」は、一日の職務が解けたあとの安らか
な心境を表している。

唐詩では、「何當破月氏、然後方高枕(何か當に月氏を破り、然る
後に方に枕を高くすべき)」(李白「塞下曲六首」其二、卷一六四)、
「燉煌太守才且賢、郡中無事高枕眠(燉煌太守才ありて且つ賢、郡中
事無く枕を高くして眠る)」(岑參「燉煌太守後庭歌」、卷一九九)な
ど大半の例が、憂いがない安らかな意で使われている。また、「是非
何處定、高枕笑浮生(是非何れの處にか定まる、枕を高くして浮生
を笑ふ)」(杜甫「戲作俳諧體遣悶」其二、卷三三一)、「隱士應高枕、
無人問姓名(隱士應に枕を高くすべし、人の姓名を問ふ無し)」(劉
禹錫「途中早發」、卷三五七)のように、隱者やそれに通じるような
放逸な姿を描寫するものも多く見られ、從來からの流れの中に位置づ
けられる。

しかし唐代には、精神的な安らかさに加えて、寝る(横になる)こ
とに實質的な意味合いが増すものが現れる。例えば、「洞房懸月影、
高枕聽江流(洞房月影懸かり、枕を高くして江流を聽く)」(張說
「深渡驛」卷八七)、「遠鐘高枕後、清露卷簾時(遠鐘枕を高くせし後、
清露簾を卷く時)」(韋應物「月下會徐十一草堂」、卷一八六)、「嶺北
嘯猿高枕聽、湖南山色捲簾看(嶺北の嘯猿は枕を高くして聽き、湖南
の山色は簾を捲きて看る)」(沈亞之「題侯仙亭」、卷四九三)、「閑居
多野客、高枕見江城(閑居野客多く、枕を高くして江城を見る)」
(許渾「贈遷客」、卷五三三)などは、水の音や猿の鳴き聲を聞いた
り景色を眺めるために、あるいはその時の姿勢として、實際枕を高くす
る様子を表したものである。また、杜甫の「衰年肺病唯高枕、絕塞愁

時早閉門（衰年 肺病みて唯だ枕を高くし、絶塞 時を愁へて早く門を閉じ）「返照」卷二三〇、「絶域惟高枕、清風獨杖藜（絶域 惟だ枕を高くし、清風 獨り藜を杖く）」（送舍弟穎赴齊州三首）其一、卷二二八）は、それぞれ肺を病んで床に就く自分の姿、遠地に赴く舍弟の姿を詠んでおり、願わしくない状況下で床に伏すしかない様子、つまり寝る行爲自体を表している。

このように「高枕」は、唐代以降使い方が多様化しているが、白居易はこれをどのように用いたのだろうか。白居易の詩に「高枕」の語は三例見られ、うち二例は寝る行爲そのものを表しているが、心地よい睡眠である點が杜甫とは對照的である。

「2935 老熟」は、猛暑でも働かなければならない官僚や農民の苦勞に着目し、それとは對照的な自己の幸福を詠い上げた詩である。白居易は、心配ごともなく自由氣ままに涼を得ている自分の姿を、次のように具體的に描いている。

臥風北窓下

風に臥す 北窓の下

坐月南池頭

月に坐す 南池の頭

腦涼脫烏帽

腦の涼しきは 烏帽を脱ぐにより

足熱濯清流

足の熱きは 清流に濯ふ

慵發書高枕

慵發して 書枕を高くし

興來夜汎舟

興來りて 夜舟を汎ぶ

「慵發して書枕を高くし」とは、氣だるくなつて氣ままに晝寝する様子であり、夜の船遊びと對になって、閑適な生活の有り様を呈している。同様に「3265 池上逐涼二首」（其一）でも、存分に眠ったあと、水邊にやって來て舟に乗る閑適なひとこまが、

窓閒睡足休高枕

窓閒 睡足りて高枕を休め

白居易の「枕」

水畔閑來上小船

水畔 閑來 小船に上る

と詠まれている。もう十分眠つたのでやめにしようという「高枕」は、涼しく心地よい睡眠そのものを意味する。この詩はそういった閑適の生活全般を指して、「誰信好風清簟上、更無一事但儻然（誰か信ぜん好風清簟の上、更に一事無く但だ儻然たるを）」と結ばれ、心身共に心地よい睡眠が、ひとつの幸福の形として詠まれていることが分かる。もう一例は、清流に石を置いて涼音を樂しむ内容の詩「3333 亭西牆下伊渠水中置石激流潺湲成韻頗有幽趣以詩記之」にある。

是時群動息

是の時 群動息み

風靜微月明

風靜かにして 微月明らかなり

高枕夜悄悄

枕を高くして 夜悄悄たり

滿耳秋冷冷

耳に滿ちて 秋冷冷たり

「高枕」の二字から、水と石の醸し出す涼しげな音色を、横になった姿勢で鑑賞していることが分かる。このように、何かを見聞きする際に枕を高くする姿勢を言う詠み方が、唐代から現れることはすでに述べた。ただ、この詩を含めた白居易の「高枕」三例が、いずれも涼を求める状況下で用いられている點には、注意を拂わなければならぬ。

當時の人々は、暑い夜には、枕を傾けて涼を得ていたものと考えられる。工藤篁氏は唐詩に見える枕について、男子結髮の慣習から角枕や陶枕であったことを指摘され、「それは固いけれども冷たく、安眠を助けるものであった」「失眠の夜は、これを敲傾することにによってさらに涼感を深め、再び熟眠を得ようとする」と述べられている。このことは、「高枕」よりも、枕を傾けるさま（あるいは枕が傾いたさま）をより端的に表した「敲枕（枕を敲てる）」の用例にも認められ

るが、枕を傾けた結果枕が高くなると考えれば、當然「高枕」の語も納涼を背景として用いることができよう。

白居易以外にも、涼の要素を含む「高枕」の例は見受けられる。「東林生早涼、高枕遠公房、(東林 早涼を生じ、枕を高くして公房より遠し)」「(錢起「靜夜酬通上人問疾」、卷二三七)や「高枕對曉月、衣巾清且涼(枕を高くして曉月に對し、衣巾は清らかにして且つ涼やかなり)」「(劉復「寺居清晨」、卷三〇五)の「高枕」も、精神的な安らかさを象徴すると同時に、前後に記された「涼」の語に一層の涼感を添え得るものである。

ただ、白居易が他と異なるのは、烏帽を脱いだり、熱かった足を清流に濯ったり(「2985老熱」)、涼を求めて窓邊で寝たあと小船に乘ったり(「3265池上逐涼」)、寢床で水が石を打つ清らかな音を樂しんだり(「3533亭西牆下伊渠水中置石……)という行爲の中に「高枕」が組み込まれ、自ら涼を求めようとする積極的意志と、それによって得られる充足感が全面に表れている點である。涼を求めて涼を得ることを主題とした詩の中で、「高枕」は、心安らかな睡眠に、一層の生理的充足感を添える効果を果たしているのである。

おもしろいことに白居易は、精神的な安らかさのみを表す際には、「高枕」ではなく「高臥」や「安枕」の語を用いた。安らかさや隱居を表すものとして同義語であったと思われるこれらの語を意圖的に使い分け、「高枕」の語と畫したのではないだろうか。

- ・君若欲高臥、但自深掩關(君若し高臥せんと欲すれば、但だ自ら深く關を掩ふのみ) (〔227〕中隱)
- ・高臥深居不見人、功名斗藪似灰塵(高臥深居して人を見ず、功名斗藪するは灰塵に似たり) (〔2629〕讀鄂公傳)

- ・玄晏家風黃綺身、深居高臥養精神(玄晏の家風 黃綺の身、深居高臥して精神を養ふ) (〔2829〕酬皇甫賓客)
- ・似鹿眠深草、如鷄宿穩枝、逐身安枕席、隨事有屏帷(鹿の深草に眠るに似、鷄の穩枝に宿するが如し、身を逐ひて枕席に安んじ、事に隨ひて屏帷有り) (〔3392〕三年冬隨事鋪設小堂寢處稍似穩暖因念衰病偶吟所懷)

このように白居易は、「高臥」「安枕」で従來通りの精神的な安らかさを表したのに對し、「高枕」によって、涼感を伴った睡眠という身體の心地よさを表した。そしてさらに、「高枕」とは逆の「枕が低い」という独自の表現を用いることによって、「高枕」とは異なる寢床の快適さを、見事に詠出したのである。

- 枕低茵席軟 枕は低く茵席は軟らかなり
- 臥穩身入牀 臥すこと穩やかにして 身は牀に入る
- 睡足景猶早 睡足りて 景猶は早く
- 起初風乍涼 起くる初め 風乍ち涼し (〔2967〕新秋曉興)
- 枕低被暖身安穩 枕は低く被は暖かにして身は安穩なり
- 日照房門帳未開 日は房門を照らすも 帳未だ開かず
- 還有少年春氣味 還有少年の春氣の味有り
- 時時暫到夢中來 時時暫らく夢中に到りて來る (〔3650〕春眠)

まず詩題から、新秋と春の詩であることが明らかである。つまり、「高枕」で涼を求めた暑い夏とは逆に、寢床のぽかぽかした温もりがいとおいしい時節なのである。ここに描かれるのは低い枕であり、しとねのふわふわした肌觸り(「茵席軟」)や夜着の温もり(「被暖」とと

もに、睡眠を極めて心地よい状態へと導いている。それは「臥穩身入牀」「身安穩」とあるように、汗をかくことなく、不快感や憂いによる寝返りを打つこともなく、體が床になじんだ心地よい感覺を言うものであろう。

また「386晏起」では、日が高くなっても寢床から出ない理由を「老い去りて慵轉た極まり、寒來たりて起くること尤も遅し」と記した上で、この上ない心地よさが次のように詠まれている。

厚薄被適性

厚薄 被は性に適し

高低枕得宜

高低 枕は宜しきを得

神安體穩暖

神安らかにして 體穩暖なり

此味何人知

此の味 何人か知る

ここでは、夜着の厚さも枕の高さもちょうどよいという言い方だが、寒くてなかなか起きられない時節であることを考えると、ぼかぼかの厚い夜着と低い枕が、心身ともに伸びやかな睡眠をもたらしたのかもれない。

寢衣の厚さや枕の高さについては、『戸子』に「孝子一夕五起、視衣之厚薄、枕之高卑、愛其親也已」(孝子一夕に五たび起き、衣の厚薄、枕の高卑を視るは、其の親を愛するなるのみ)、『北堂書鈔』卷二二九、卷一三四引)とあり、夜中に五回起きて親の服や枕の様子を見に行き、孝を盡くすべきことが説かれている。孝の實踐という側面から、寢衣の厚さや枕の高さを氣にかけ、安らかな睡眠を保つという發想は従来よりあった。白居易はこれを儒教的背景においてではなく、日常における自分自身の心地よい眠り、すなわち極めて個人的な幸福感を表すのに用いたのである。

では、「枕低」とは具體的にどういった枕の状態を言うのだろうか。

白居易の「枕」

先に述べたように、當時は陶枕や角枕など固くて高い枕を使っていたと思われる。白居易の「高枕」が涼しさと固さといった屬性を持っていたように、いまかに「枕低」が温もりや柔らかさにつながるものと假定すると、次のような枕の表現が参考となる。

・十兩新綿褥、披行暖似春、一團香絮枕、倚坐穩于人(十兩新綿の褥、披て行くに暖かなること春に似たり、一團香絮の枕、倚りて坐するに人よりも穩かなり) (3852能無愧)

・醉依香枕坐、慵傍爇爐眠(醉ひて香枕に依りて坐し、慵くして爇爐に傍ひて眠る) (3852歲除夜對酒)

前の、よりかかると膝枕より穩やかだという「香絮枕」は、香を焚きしめた眞綿を詰めた軟らかい括り枕である。後の「香枕」も、大晦日の夜、酒に酔って爐の傍らでよりかかるとあり、ぼかぼかした心地よい眠りを誘っていることが想像できる。

これらの枕は、文字通り芳香が最大の特徴であり、枕というよりは、寢床以外の場所でよりかかるとクッションのようなものと考えられる。しかし、「枕」に柔らかさや温もりといった感觸を含ませ、心身共にとろけそうな心地よい睡眠を詠出している點は、「低枕」の詠み方と共通している。このことから「枕低」の枕を、「香絮枕」のような括り枕と推測することも可能ではないだろうか。僧侶は、髻を保護する必要がないため、括り枕を用いた。俗にいう「坊主枕」である。もし、「枕低」の「枕」が括り枕のような枕を表すのであれば、ここからはさらに、起きたあと髪型がぼさぼさに亂れようと構わない不精な姿をも、讀みとることができよう。白居易以外に、唯一低い枕の描寫が見られる姚合の詩「武功縣中作三十首」にも、僧侶のような脱俗生活を好む内容が見られる。

ちなみに、唐詩において「香枕」の語は、晉の賈充の娘が韓壽に香枕を贈った故事を踏まえたものが一例、闍怨詩の題材としての用例が二例あるが、あとには孤獨な心のうちが描かれており、香枕の性質にも言及はされない。白居易は、闍怨詩の題材であった「香枕」もまた、自分の身體を横たえる充足感を詠うのに用いたと言える。

以上、白居易の枕の高低に關する表現を見てきた。「高枕」は憂いがなく安らかであるイメージを持つ語であったが、白居易はそこから、暑い夏に高い枕で寝ることによって得られる涼しさを最大限に引き出した。一方、「枕低」という獨自の表現によって、枕が低いゆえに、寢床がぼかばかだからこそその穩やかな眠りを詠出したのである。しかし、憂いがないことを表す「高枕」の語が深く根付いていた背景において、「枕低」と詠い上げるのは相當大膽な試みではなかっただろうか。

二、「轉枕」について

「轉枕（枕を轉ず）」は、枕を返す動作を言う。唐以前に、枕を返す表現は見あたらないようだが、唐詩には「翻枕（枕を翻す）」「回枕（枕を回す）」「顛倒枕（枕を顛倒す）」「轉枕（枕を轉ず）」といった表現が現れ、憂いなどによる不眠のさまを表している。

このうち「轉枕」の語は、白居易に二例と權徳輿に三例認められる。權徳輿は、「轉枕睡未熟、擁衾淚已濡」（枕を轉じて睡未だ熟せず、衾を擁げば涙已に濡らす）、「夜泊有懷」（不堪風雨夜、轉枕憶鴻妻（堪へず風雨の夜に、枕を轉じて鴻妻を憶ふ））、「中書夜直寄贈」（卷三二九）、「轉枕挑燈候曉鷄、想君應歎太常妻（枕を轉じ燈を挑けて曉鷄を候ち、君の應に太常の妻たるを歎くべきを想ふ）」

（太常寺宿齋有寄、卷三二九）と、遠く離れた人に思いを馳せて眠れないさまを表すのに、これを用いている。白居易「92二睡覺」に見られる「轉枕」も、不眠のさまを表しているが、その背景には老衰がある。

星河耿耿漏綿綿

星河耿耿として漏綿綿たり

月闌燈微欲曙天

月闌く燈微にして曙けん欲する天

轉枕頻伸書帳下

枕を轉じて頻伸す 書帳の下

披裘箕踞火爐前

裘を披て箕踞す 火爐の前

老眠早覺常殘夜

老眠早く覺めて常に夜を殘し

病力先衰不待年

病力先づ衰へて年を待たず

五欲已銷諸念息

五欲已に銷え 諸念息み

世間無境可勾牽

世間 境の勾牽すべき無し

明け方が覺めたあと枕を置き直して伸びをし、服を引っかけて爐の前に坐るのは、確實に迫り来る老いに對し、ひとり靜かに物思ふ姿である。憂いによって眠れずに起き上がり、着物を羽織ったり徘徊したりする表現は一つのパターンであり、寢返りによる不眠の描寫も、『詩經』から六朝にかけて定型化したものと考えられる。白居易の場合、滾るような激しい憂いによって眠れないわけではなく、ある種の心の不安すら詠われている點が特徴的ではあるが、權徳輿の例と併せて、從來からの系譜に位置づけることができよう。

ところが白居易のもう一例の「轉枕」は、明らかに様相が異なっている。江州の詩「1066曉寢」である。

轉枕重安寢

枕を轉じて重ねて安寢し

回頭一欠伸

頭を回して一たび欠伸す

紙窓明覺曉

紙窓明らかにして曉を覺え

布被暖知春

布被暖かにして春を知る

莫強疏慵性

疏慵の性に強るは莫く

須安老大身

須く老大の身を安んずべし

鷄鳴猶獨睡

鷄鳴くも猶ほ獨り睡る

不博早朝人

早朝人に博へず

枕を置き直して安らかな二度寝をし、頭をもたげて伸びをひとつ。紙窓を透けて入ってくる光に朝を知り、夜着の暖かさに春を感じるとは、「早朝人」とは對照的な心地よい朝寝のさまである。これは白居易が「須く老大の身を安んずべし」と肯定する「疏慵性」の具體的な現れであり、この「轉枕」が不眠や憂いからくる動作でないことは言うまでもない。それは暢氣な朝の二度寝を描寫するために詠まれた枕返しであり、この枕返しによって再び心地よい眠りへと入っていくこと、心地よい睡眠がさらに持續されることが、鮮明に印象づけられていると言えよう。伸びを表す「欠伸」の語も、『禮記』や『儀禮』に出現があり、本來は君子の疲勞感をイメージさせるべき語であった。この詩において「轉枕」「欠伸」の語は、それぞれが被っていた「憂いによる不眠」「疲勞」のイメージを脱ぎ去り、朝の心地よい惰眠という全く新しい像を結んでいるのである。

三、「枕臂」について

臂枕で寝る表現は、『論語』述而篇の「子曰、飯疏食飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣（子曰く、「疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げて之を枕とするも、樂しみ亦た其の中に在り）」を典故とする。清貧な生活の中に精神的な樂しみがあると説いたもので、「曲肱而枕之」「飯疏食飲水」は貧しい生活を象徴している。

白居易の「枕」

唐以前では「居常待其盡、曲肱豈傷冲（常に居りて其の盡くるを待ち、肱を曲げて豈に冲を傷らんや）」（陶淵明「五月旦作、和戴主簿」、晉詩卷一六）、「寂寥曲肱子、瓢飲療朝飢（寂寥たり曲肱の子、瓢飲もて朝飢を療す）」（謝靈運「君子有所思行」、宋詩卷二）などがこれを踏まえた用例であり、唐以降も「曲肱」の語は「枕肱」「枕臂」「枕手」など表現を擴げながら、引き続き詩文に散見する。唐詩に見られる十三例のうち四例が白居易のものだが、まず白居易以外の例を見てみよう。

「甘辛敗六藏、氷炭交七情、唯思曲肱枕、搔首擲華纓（甘辛六藏を敗り、氷炭七情に交る、唯だ思ふ肱を曲げて枕にし、首を搔きて華纓を擲つを）」（權德輿「多病戲書因示長孺」、卷三二〇）は病による辭官願望を、「醉後曲肱林下臥、此生榮辱不須論（醉後肱を曲げて林下に臥し、此の生榮辱論ずるを須ひず）」（牟融「寫意二首」其一、卷四六七）は遠く離れた荒館で獨り酒を飲む姿を詠んでおり、清貧さを表している。杜甫は、從兄を巢父と許由の輩になぞらえ、野をかいて熟睡する自由奔放な姿を「日斜枕肘寢已熟、啾啾唧唧爲何人（日斜肘を枕にして寝ぬること已に熟し、啾啾唧唧として何人とか爲す）」（杜甫「狂歌行贈四兄」、卷三三四）と詠むが、委細かまわず自らの生き方を守る精神もまた、『論語』の高潔な快樂と同質のものであろう。「祇有君同癖、閑來對曲肱（祇だ君の癖を同じくする有り、閑來對して肱を曲げん）」（陸龜蒙「襲美見題郊居十首因次韻酬之以伸榮謝」其十、卷六二二）も、自身の無精さと不才を言ったあと、友人とともに貧しくとも隱逸な生活を樂しもうという内容で、『論語』を踏まえていることが分かる。

また、「永日還敲枕、良宵亦曲肱、神閑無萬慮、壁冷有殘燈（永日

還た枕を敲て、良宵亦た肱を曲ぐ、神閑にして萬慮無く、壁冷たくして殘燈有り」(齊己「永夜」、卷八四一)は、憂いのない悟りの境地に達したかのような状態を、「中宵吟有雪、空屋語無燈、靜境唯聞鐸、寒床但枕肱(中宵吟じて雪有り、空屋語りて燈無し、靜境唯だ鐸を聞く、寒床但だ肱を枕にす)」(雍陶「同賈島宿無可上人院」、卷五一八)は、愁いを拂おうと無可上人を訪ねたときの様子を詠んでおり、ともに佛教色の濃い詩である。煩惱のない穏やかな境地も、精神的逸樂という點では、典故から著しく離れるものではない。

残り三例は、實際の姿勢により即した表現である。「身作匡床臂爲枕、朝珮縱縱王晏寢(身は匡床と作り臂を枕と爲し、朝珮縱縱として王晏寢す)」(元稹「樂府古題、冬白紵歌」、卷二二)、「但得鴛鴦枕臂眠、也任時光都一瞬(但だ鴛鴦に臂を枕にして眠るを得、也た時光の都て一瞬なるに任す)」(韓偓「厭花落」、卷六八三)は男女の睦まじい腕枕を表したもので、「覺來正是平階雨、獨背寒燈枕手眠(覺め來れば正に是れ階を平らかにする雨、獨り寒燈を背にし手を枕にして眠る)」(李商隱「七月二十八日夜與王鄭二秀才聽雨後夢作」、卷五三九)は、夢から覺めると燈りを背に手枕で眠っていたという姿勢描寫であり、いずれも典故との直接の關連は見出せない。

白居易の四例も全て實景描寫であり、典故とは異なったイメージを喚起している。まず、江州の作「958除夜」を見てみよう。大晦日の夜は、左遷の地にあつてはことに、無情な時の流れを感じさせた。白居易は、過去を振り返って感慨にふける自身の姿を、

薄晚支頤坐 薄晚 頤を支へて坐し
中宵枕臂眠 中宵 臂を枕にして眠る

と描いている。この詩は、左遷後三年目を迎えるという事實を述べる

にとどまり、それに對する憂いや悲しみの情は直接吐露されない。しかし、通常ならば皆が聚つて宴席を圍むはずの大晦日の夜だからこそ、頬杖をついて座し、臂を枕に横になるという姿勢描寫は、かえつて鬱々とした内面を如實に體現しているのではないだろうか。

このほか臂枕で寝る描寫は、退居後の作に三例見られる。いずれもきちんと床に就くのでなく、その邊りにちよつと横になるさまを描いているが、そのイメージから窺える心的背景は「958除夜」とは著しく異なる。

放杯書案上 杯を放つ 書案の上

枕臂火爐前 臂を枕にす 火爐の前

老愛尋思事 老いて愛く事を尋ね思ひ

慵多取次眠 慵くして多く取次に眠る

妻教卸烏帽 妻は烏帽を卸さしめ

婢與展青氈 婢は與に青氈を展ぶ

便是屏風樣 便是是れ屏風の樣

何勞畫古賢 何ぞ古賢を畫くを勞せん (9549 偶眠)

これはうたた寝を詠じた詩である。酒を飲んでほろ酔いになり、杯を置いて爐の前に臂枕で横になる。年のせいかあれこれ思いめぐらすようになり、惰眠を貪ることも多くなつた。體にはアルコールが入り、爐の前でばかばか温かい上に、妻が帽子を脱がせ奴婢が青氈を敷いてくれることで、心地よさが一層増長している。末句ではさらにこの情景を外側から捉え、十分繪になると満足してみせており、この日常のひとこまに對するいとおしさが、よく表された一首と言えよう。

また、「9581初致仕後戲酬留守牛相公并呈分司諸寮友」では、辭官後の解放感を「挂冠自在勝分司(冠を掛け自在なること分司に勝る)」

と喜び、腹いっぱい筍や魚を食べ、酒に酔って服をひっかけ臂を枕に横たわるさまが、

炮筍烹魚飽餐後

筍を炮き魚を烹る 飽餐の後

擁抱枕臂醉眠時

抱を擁き臂を枕にす 醉眠の時

と詠まれ、「350」閑樂「でも、散歩や散策の樂しさと並べて、空腹に朝酒を嗜んで横になる心地よさが、

空腹三杯卯後酒

空腹三杯卯後の酒

曲肱一覺醉中眠

肱を曲げて一たび覺む 醉中の眠

と詠まれている。これら三首に見られる臂枕の描寫は、いずれも酒を嗜んだあとの心地よいたた寝を表している。それは、世俗の煩わしさと対照的な精神の逸樂という點において『論語』の典故と一脈つながりながら、清貧さとは無縁の、きわめて具體的な白居易の日常の實態を生き生きと描き出している。腹いっぱい食事や飲酒、温かい服、家人によって帽子が脱がされ筵が敷かれることと連鎖して、生理的充足感を引き出しているのである。しかしまた、左遷先の江州においては、憂いに沈む姿がこの表現を用いて描寫されたこともなおざりにはできない。除夜に頰杖をついて坐し臂を枕に横たわる姿は、鬱々とした心情をそのまま吐き出すより鮮明に、白居易の内面を映し出しているからである。白居易は、従来の用法に拘ることなく、自分自身の實景に即し實感に基づいて、獨自の用い方を實踐したと言うことができよう。

四、「枕書」「枕琴」について

書物や琴は、古來より文人の愛好品であった。「玩書琴以條暢兮、考性命之變態（書琴を玩び以て條暢として、性命の變態を考ふ）」（劉

白居易の「枕」

歎「遂初賦」、「古文苑」卷五）、「且從容兮自慰、玩書琴兮遊戲（且く從容として自ら慰め、書琴を玩びて遊戲す）」（「楚辭」王逸「九思・傷時」）などからは、書琴によって心の娛しみを得たことが看取できるが、隱者と書琴のイメージは、とりわけ陶淵明に至って鮮明になったようだ。陶淵明は、「悅親戚之情話、樂琴書以消憂。（親戚の情話を悦び、書琴を樂しみ以て憂を消さん。）」（「歸去來」、「文選」卷四五）、「衡門之下、有琴有書、載彈載詠、爰得我娛（衡門の下に、琴有り書有り、載ち彈じ載ち詠じ、爰に我が娛しみを得たり）」（「答龐參軍」、晉詩卷一六）と、隱遁生活の樂しみとして書琴を詠っている。そして、「清琴橫牀、濁酒半壺（清琴、牀に横たへ、濁酒、壺に半ばなり）」（陶淵明「時雲」其四、晉詩卷一六）、「琴聲遍屋裏、書卷滿牀頭（琴聲は屋裏に遍く、書卷は牀頭に滿つ）」（庾信「擬詠懷」其十八、北周詩卷三）といった句からは、彼らが書物や琴を寢床に置いて愛していたことが窺える。こういった姿は、「枕籍琴書滿、褰帷遠岫連（枕籍に琴書滿ち、帷を褰ぐれば遠岫連なる）」（孟浩然「題長安主人壁」、卷一六〇）、「花裏棋盤憎鳥汚、枕邊書卷訝風開（花裏の棋盤は鳥の汚すを憎み、枕邊の書卷は風を訝へて開く）」（韋應物「假中枉盧二十二書亦稱臥疾兼訝李二久不訪問以詩答書因亦戲李」二、卷一九〇）など、唐詩にも引き續き詠まれている。

白居易にも「妻子在我前、琴書在我側（妻子は我が前に在り、琴書は我が側に在り）」（353自餘杭歸宿淮口作）、「除親簿領外、多在琴書前（簿領に親しむを除く外、多く書琴の前に在り）」（358郡亭）、「屋中有琴書、聊以慰幽獨（屋中に書琴有り、聊か以て幽獨を慰む）」（352春日閑居三首）其「一」など、書琴が手元にあることを言っている愛着を表すものがあるが、このほか、それらを枕にして寝ることを言

うものが見受けられるのである。

・盡日後廳無一事、白頭老監枕書眠（盡日後廳一事無し、白頭の老監書を枕にして眠る）〔2529 祕省後廳〕

・看山盡日坐、枕帙移時睡（山を看着盡日坐し、帙を枕にし時を移して睡る）〔2538 閑居〕

・坐傾數杯酒、臥枕一卷書（坐して數杯の酒を傾け、臥して一卷の書を枕にす）

〔2270 和微之詩二十三首（其二）和朝回與王鍊師遊南山下〕
 ・臥枕一卷書、起嘗一杯酒（臥して一卷の書を枕にし、起きて一杯の酒を嘗む）〔3042 隱几贈客〕

・移牀就日簷閒臥、臥詠閑詩側枕琴（牀を移し日に就きて簷閒に臥し、臥して閑詩を詠じ側てて琴を枕にす）〔1333 虛白堂〕

・向夕褰簾臥枕琴、微涼入戶起開襟（夕に向ひ簾を褰げ臥して琴を枕にし、微涼戸に入り起きて襟を開く）

〔3159 閑臥有所思一首（其一）〕
 ・臥將琴作枕、行以鍾隨身（臥しては琴を將て枕と作し、行きては鍾を以て身に隨ふ）

〔3587 醉中得上都親友書以豫停俸多時憂問貧乏偶乘酒興詠而報之〕

例えば「枕石」は山林での隱遁生活を、「枕麴」「枕杯」「枕酒卮」は酒への耽溺や愛好を、「枕戈」は軍事に専念することを象徴的に表した語である。同様に「枕書」や「枕琴」も、琴書への愛好を表した抽象的な表現であると考えられなくはない。しかし、白居易の句を見ると、「一卷の書」と書物に量詞を付けてそれが實物の書物であることを限定したり、琴を「側」てて枕にする、「臥」して枕にする、

「時を移して眠る」など、實際に書物や琴の上に頭を載せて眠ったことを強調した、リアルな詠み方となっている。石や杯とは異なり、枕としてちょうどよい高さ、大きさである。「一卷の書」であり「琴」であるがために、説得力をもって睡眠の心地よさが伝えられるのである。琴や書物を身近に置いて愛好するだけでなく、實際それを枕にしてしまふ氣ままさと心地よさが、見事に詠出されていると言えよう。

ではこれは、白居易において全く新しい表現だったのだろうか。まず、書物を枕にするという表現は、漢・桓寬『鹽鐵論』（卷五、殊路）に「夫重懷古道、枕籍詩書、危不能安、亂不能治。（夫れ重ねて古の道を懐ひ、詩書を枕籍すれば、危ふきも安んずる能はず、亂るも治むる能はず。）」とあるのが古い例であろう。これは古の書物への耽溺を言うものであり、後漢・班固「答賓戲」（『文選』卷四五）の「徒樂枕籍書、紆體衡門。（徒に經を枕にし書を藉き、體を衡門に紆むるを樂しむ。）」も、同様の状態を表している。つづいて「金版玉策之記、枕籍忘疲。（金版玉策の記は、枕籍して疲れを忘る。）」（庾信「周故大將軍趙公墓銘」、『文苑英華』卷九四八）、「前後百卷文、枕藉皆禁鸞（前後百卷の文、枕藉するに皆禁鸞なり）」（杜甫「八哀詩、故秘書少監武功蘇公源明」、『杜詩詳注』卷一六）など、いずれも讀書への没頭のさまを表した句である。

このように、書物を枕にするとは、讀書への没頭や耽溺といったイメージを喚起しうる表現であった。しかし白居易の詩句がイメージさせるのは、たまたま手の届くところにある書物を枕がわりにし、あるいは酒でも引っかけながらごろりと横になる、氣ままな生活のひとつである。

さらに白居易は、睡眠と讀書の關係について、眠氣を引くために書

物を讀むという自分なりのスタイルを、詩中に明示しているのである。

・趁涼行繞竹、引睡臥看書（涼を趁ひて行くゆく竹を繞り、睡を引きて臥して書を見る）〔1284 晚庭逐涼〕

・書將引昏睡、酒用扶衰朽（書は將て昏睡を引き、酒は用て衰朽を扶く）〔3025 隱几贈客〕

・行携杖扶力、臥讀書取睡（行くゆく杖を携へて力を扶け、臥して書を読み取って睡を取る）〔302 郡中即事〕

・書卷略尋聊取睡、酒杯淺把粗開顏（書卷は略ぼ尋ねて聊か睡を取り、酒杯は淺く把りて粗ぼ顔を開く）〔368 閑居〕

従來、讀書に倦んで横になつたり、横になつて讀書するさまを言うものはあるが、白居易のそれは睡眠のための讀書であつて、讀書による疲労がもたらした睡眠や讀書時の單なる姿勢描寫ではない。古を學ぶための士大夫の讀書ではなく、煩雜な現實から離れて心樂しませるような清逸な讀書でもない。ここに描かれるのは、ぐつと深い眠りに入るための讀書、すなわち、睡眠という極めて生理的な行爲をより充足させるための、寢床における讀書である。そしてこのスタイルは、宋代の蘇軾や陸游に繼承されている。

一方、琴を枕にするという表現は、晉・潘尼「贈二李郎詩序」に「離儉劇之勤、就放曠之逸、枕鳴琴以俟遠致。（儉劇の勤を離れ、放曠の逸に就き、鳴琴を枕にして以て遠致を俟つ。）」（『太平御覽』卷二五九引）の用例が見えるのみで、隱居のさまを抽象的に表したものと考えられる。これに對して白居易の句は、閑適な生活の中で、實際に琴を枕に寝るさまを具體的に表しており、現實により密着した詠み方と言へる。

文人の愛好品であつた書物や琴は、古來よりさまざまに詠じられ、

白居易の「枕」

とりわけ陶淵明以降は、隱者や自由人の象徴として詠まれるようになった。ところが白居易は、書物や琴を、氣ままで心地よい睡眠と結びつけて詠じ、きわめて具體的な生活像として呈示している。書物を枕にすると言へば、讀書への耽溺をイメージさせる表現であつたが、白詩において書物や琴を枕に横たわる姿は、うたた寝の氣ままさや懶惰な様子を見事に詠出している。また、「枕」の語は使われないが、寢轉がって書物を開く姿は、疲労の結果ではなく、眠氣を引くためという白居易なりの自由な讀書スタイルであり、その延長線上には、ぐつと心地よい眠りが内包されているのである。ここにもまた、白居易が獨自の表現によつて、氣ままな眠りという獨自の幸福世界を描こうとしたその一端が、垣間見られるのではないだろうか。

おわりに

白居易は「枕」の語を巧みに用いることによつて、睡眠による充足感を多方面から見事に表現している。唐代とくに中唐は、詩の題材の擴張や日常化、口語や俗語の取り込み等によつて表現の幅が擴張した時期であり、白居易の「枕」表現の豊富さもその流れに沿うものと言える。しかし、ここに取り上げた表現は、詩語がもつ從來の意味やイメージと違えて白居易が獨自に用いたものであつた。憂いのない安らかなさまを象徴する表現として根付いていた「高枕」の語を、とりわけ涼感を得ながら寝る状況下で用い、逆に寢床の温かさや柔らかさを表すには「枕低」と詠い上げた。親の枕の高さや寝衣の厚さを氣にかけることは孝の實踐とされていたが、これを自分の寢床の心地よさを表すのに用いた。清貧の中の精神的逸樂を表す「曲肱・臂枕」も、酒を引っかけたその邊りにちよつと横になる氣ままさを詠うのに用いて

いる。もっともこれらの表現は、安らかさや楽しみといった意味合いからすると、閑適の喜びを表すには用いやすかったかも知れない。ところが白居易にあっては、憂いによる不眠をイメージさせる枕返し「轉枕」も、心地よい二度寝に入る前の枕の置き直しを表し、讀書への耽溺という士大夫の勤勉さをイメージさせる「枕書」も、愛好品としての書物を実際枕にして寝る気ままさを表す表現となつて、心地よい眠りを非常に効果的に詠出しているのである。「枕」の語自體は、白居易の詩全體を通して散見するものの、今回、白居易に獨自のものとして取り上げた表現は、下邳期の「枕帙（帙を枕にす）」（258閑居）、江州期の「轉枕（枕を轉ず）」（188曉寢）、杭州期の「側枕琴（側てて琴を枕にす）」（133虛白堂）、杭州より歸還後の洛陽の「高低枕得宜（高低枕宜しきを得）」（88晏起）を先驅けとして、以下、大和以降の洛陽退居後に集中する。これはまた、閑適の詩境が、晩年に至るにつれて完成度を増す経緯と重ね合わせて見ることができ

る。白居易は、日常の中に掬い取った幸福を、平易な言葉を用いて詩に詠んだ。しかし、従來の表現をそのまま使うのではなく、オリジナルの詠み方で新しい詩境を創り出そうとしたのである。それは、生理的な充足感に裏付けられた獨自の幸福の世界を、より現實に即した獨自の詠み方で、積極的に詩の中に定着させていこう、という相當強い創作意識に支えられたものであっただろう。「枕」の語は、睡眠の心地よさを詩に詠もうとするエネルギーが、竝大抵のものではなかったことを物語っている。

中唐は、詩材の擴張や日常化、口語や俗語の取り込み等に伴つて表現が擴張した時期であるが、白居易の「枕」の語には、詩語のイメー

ジの轉換という方法によって、詩の表現が擴張した例を見ることができ

注

- (1) 埋田重夫氏「白居易と睡眠―閑と適を充足させるもの―」（中國文學研究）一六、一九九〇）、大橋賢一氏「中國古典詩における晝寢について―唐代を中心に―」（筑波中國文化論叢）二二、二〇〇三）に詳しい。
- (2) 埋田重夫氏「白居易と身體表現―詩人と詩境を結ぶもの―」（中國文學研究）二〇、一九九四）、澤崎久和氏「白居易詩「飽食」考―白居易の詩における身體と精神―」（福井大學教育學部紀要第一節人文科學（國語學・國文學・中國學編）四七、一九九六）に指摘がある。
- (3) 拙稿「白詩における生理的感覚に基づく充足感の詠出―「伸びをする」「頭を掻く」表現を中心に―」（『白居易研究年報』第五號、勉誠出版、二〇〇四）で論じた。
- (4) 拙稿「唐詩における「枕」の語の使用―白詩における「枕」表現の特徴を知る手がかりとして―」（『中國中世文學研究』四五・四六合併號、二〇〇四）。
- (5) 白居易の詩は『白居易集箋校』（朱金城箋校、上海古籍出版社）、白居易以外の唐代の詩は『全唐詩』（中華書局點校本）、唐以前の詩は『先秦漢魏晉南北朝詩』（遼飲立輯校、中華書局）に據る。なお、白居易の詩の作品番號は、花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店）の「綜合作品表」に従つた。
- (6) 低い枕の描寫は、白居易とほぼ同時代の姚合の詩に唯一「野客嫌杯小、山翁喜枕低（野客は杯の小なるを嫌ひ、山翁は枕の低きを喜ぶ）」（武功縣中作三十首）其十八、卷四九八）が見えるのみであり、姚合の詩には、枕や睡眠に關する狀況は記されていない。白居易と姚合の關連につ

いては、別途改めて考察を加えたい。

- (7) この詩は許渾の『丁卯集』では「貽遷客」に作る。『全唐詩』巻五二六では杜牧「貽遷客」(貽字、一作贈)として収められているが、四部叢刊本の『樊川詩集』には未收。

- (8) 杜甫のこれらの「高枕」が安眠につながることは、松本肇氏「杜甫の「高枕」について」(『中國文化』六〇、二〇〇二)に詳論がある。

- (9) 工藤篁氏「鼓枕」について」(『中國語學』七二、一九五八)。

- (10) 「鼓枕」について、岩城秀夫氏「遺愛寺の鐘は枕を敲てて聴く」(『國語教育研究』八、一九六三)では、眠れずに體を轉じたとき、重心が偏って生じる枕の傾斜を表したものであるという。また戸川芳郎氏「鼓枕について」補論」(『汲古』一四、一九八八)では、「角枕を不安定な姿勢に立てて傾側させること」という。

- (11) たとえば、「長簾貪歇枕、輕巾懶挂頭(長簾貪りて枕を歇て、輕巾慵くして頭に挂く)」(司空曙「苦熱」、卷二九三)、「髮短梳未足、枕涼閑且敲(髮は短くして梳るに未だ足らず、枕は涼しくして閑に且く敲つ)」(杜牧「秋思」、卷五二三)などの句に見られる「鼓枕」は、涼を得る様子を端的に表している。

- (12) 「枕簟」「枕席」についても同様である。「枕簟」については、拙稿(注4)で述べた。

- (13) 「高臥」「安枕」は、「高枕」と同じように精神的な安らかさや隱遁を表すのに用いられてきた語である。「卿累違朝旨、高臥東山。(卿累しは朝旨に違ひ、東山に高臥す。)」(『世說新語』排調篇)、「出於下計、陛下安枕而臥矣。(下計に出づれば、陛下は枕に安んじて臥す。)」(『史記』廉布列傳)などの例がある。

- (14) 白居易も「病中詩十五首」の序文では「杜門高枕、澹然安閑。(門を杜ちて枕を高くし、澹然として安閑たり。)」と、離俗や隱遁を象徴するものとして定着していた「杜門高枕」の表現をそのまま用いている。

- (15) 「3768 新秋喜涼」に「適得炎蒸月、尤宜老病身、衣裳朝不潤、枕簟夜相親(炎蒸の月を過ぎ得て、尤も老病の身に宜し、衣裳 朝潤はず、枕簟 夜相ひ親しむ)」の句が見えるが、「枕簟夜相親」も、體が汗をかくことなく寝床になじんでいる心地よさを表現したものであろう。

- (16) 養生の面でも、枕は高すぎない方がよいという考え方が、早くからあったようである。「楚辭」天問に、「彭鏗對雉、帝何饜。受壽永多、夫何久長。(彭鏗 雉を對むれば、帝何ぞ饜けたる。壽を受くること永多、夫れ何ぞ久長たる。)」とあり、王逸は「彭鏗至八百歲、猶自悔不壽、恨枕高而唾遠也。(彭鏗 八百歲に至るも、猶ほ自ら壽ならざるを悔ひ、枕高くして唾遠きを恨むなり。)」と注している。唐代の孫思邈「保生銘」(『全唐文』卷一五八)にも「睡不苦高枕、唾涕不遠願。(睡るに苦だしくは枕を高くせず、唾涕は遠願せず。)」とある。

- (17) 唐代に陶枕が使用されていたことについては、三上次男氏「中國の陶枕」(『唐より元へ』(三)上)次男著作集4『中國陶磁史研究』中央公論美術出版、一九八九)、龜井明德氏「唐三彩陶枕の形式と用途」(『琉球・東アツアの人と文化 高宮廣衛先生古希記念論集』下巻、高宮廣衛先生古希記念論集刊行會、二〇〇〇)に詳しい。なお、北宋・張耒「謝黃師是惠碧瓷枕」詩(『張石史文集』卷二二)には、「腦寒髮冷泥丸驚」(腦寒く髮冷く泥丸驚く)と、陶枕が涼感を増すことが詠われている。

- (18) 『中國文化のルーツ』下(郭伯南、東京美術・人民中國雜誌社、一九九〇)では、靠枕(體をもたせかける軟らかい枕、醫枕の一つ)が唐代から始まった例として、白居易のこの句を挙げています。

- (19) 史鳳「傳香枕」(卷八〇二)。

- (20) 李暇「擬古東飛伯勞歌」(卷七七三)と楊凝「花枕」(卷二九〇)。

- (21) これらと似た動作を表すものに「移枕(枕を移す)」「正枕(枕を正す)」の語が見えるが、これらは不眠や憂いの心情と直結するものではなかった。拙稿(前掲注4)参照。

(22) 「展轉」の使用例については、佐藤大志氏「展轉の系譜」(『中國中世文學研究』四・五・四六合併號、二〇〇四)に詳しい。また、白居易において「展轉」の語は、「夢郷遷客展轉臥、抱兒寡婦彷徨立(郷を夢みる遷客は展轉として臥し、兒を抱く寡婦は彷徨として立つ)」(『88山鷓鴣』)、「爲感君王展轉思、遂教方士殷勤覓(君王が展轉の思に感ずるが爲に、遂に方士をして殷勤に覓めしむ)」(『596長恨歌』)と、憂いの姿を描寫している。

(23) 「博」は「交換する、引き換える」の意の俗語。『宋書』卷九五索虜傳に「我往揚州住、且可博土地。(我揚州に往きて住み、且つ土地を博ふべし。)」とあり、その原注に「僮人謂換易爲博。(僮人は換易を謂ひて博と爲す。)」とある。

(24) 前掲注(3)。

(25) 白居易以前にも、「展轉」が不眠のイメージに繋がらない例はある。張望「枕賦」(『北堂書鈔』卷一三四)の「爾乃六安其形、展轉唯擬、撫引應適、永御君子。(爾して乃ち其の形を六安にし、展轉として唯だ擬り、撫引して應に適すべくんば、永く君子に御らしめん。)」、および卜承之「無患枕贊」(『北堂書鈔』卷一三四)の「展轉枕之、寤寐含喜。(展轉として之に枕し、寤寐に喜びを含む。)」は、それぞれ六安枕・無患枕という特殊な枕の特性として安らかに寝られることを言う。枕返しによる不眠のイメージを、心地よい朝寝のイメージへと轉換して用いた白居易の用例とは、質的に異なるであろう。

(26) 中村喬氏『中國歲時史の研究』(『除夜雜俗管見』朋友書店、一九九三)では、梁・宗懐『荆楚歲時記』を引き、晦日に馳走を調べて會聚宴飲する風習があったこと、唐代に直接これを書いた文獻は見出さないが、白居易「三年除夜」がこれを詠じた例であることが指摘されている。

(27) 「1107年三月三十日別徹之於灑上……」では、忠州への道中に元稹との再會を果たして涙にくれる様子を、「醉悲灑淚春杯裏、吟苦支頤曉

燭前(醉ふこと悲しくして涙を春杯の裏に灑ぎ、吟ずること苦しくして頤を曉燭の前に支ふ)」と詠む。

(28) 埋田重夫氏「白居易と身體表現 詩人と詩境を結ぶもの」(前掲注2)では、動作や變貌を伴った身體の描寫は、その時その場における白居易の微妙な感情を表現するうえで絶妙な効果を發揮していることが指摘されている。

(29) 澤崎久和氏「白居易と繪畫」(『福井大學教育學部紀要第I部人文科學(國語學・國文學・中國學編)』四〇、一九九一)では、年をとって何事にももうげな白居易のうたた寝の姿の描寫が、眼前に見るような視覺的印象を與えていると述べられている。

(30) この二句は『全唐詩』卷二二二では「一作」の中に見える。

(31) 「讀軍書倦、因馮几寐、不復就枕矣。(軍書を讀みて倦み、因りて几に馮って寐ね、復た枕に就かず。)」(『漢書』王莽傳下)、「聽政理事、怠則覽書。傾倚偃息、隨體與居。(政を聽き事を理め、怠れば則ち書を覽る。傾倚偃息し、體に隨ひて與居す。)」(李尤「讀書枕銘」、『藝文類聚』卷五五引)、「竝視曹公器物。……書車又作歧案、以臥視書。(竝びに曹公の器物を視る。……書車 又歧案を作り、以て臥して書を視る。)」(『陸雲集』卷八「與兄平原書」)など。

(32) 「忘懷杯酒逢人共、引睡文書信手翻(懷を忘るる杯酒は人に逢ひて共にし、睡を引く文書は手に信じて翻る。)」(蘇軾「次答邦直、子由五首」其一、「全宋詩」卷七九八)、「酒是治愁藥、書爲引睡媒(酒は是れ愁ひを治むるの藥、書は睡を引くの媒たり)」(陸游「晚步合北歸」、『全宋詩』卷二九五)の句がある。